平成24年度　雙葉中学校（国語）　解答・解説

解答

一

問一　一輪の花にも生命があるのだから、きれいだからといって摘んですぐに捨ててしまうのではなく、最後まで大切にすべきだということ。

問二　おだやかな〔ヽ〕いう仕方で

問三　お酒ばかり飲んでいてお金を使ってしまったため、手に入れた農場まで失ってしまったということ。

問四　カランは陰気で汚い風ぼうである上に、つれあいを三人も亡くした過去があるため、子どもたちの間で彼に関する気味の悪いうわさが広まったから。

問五　カランを追いはらう〔ため。〕

問六　A　すりぬけ〔ヽ〕　B　たちはだかっ〔て〕　C　おしのけ〔て〕

問七　エ

問八　歌をうたってやると言えば、「わたし」は喜んで、自分が大金を盗んだことを誰にも言わないでいてくれるだろうというもの。

問九　Ⅰ　エ　Ⅱ　イ　Ⅲ　ア　Ⅳ　ウ

問十　大金を盗んだところを「わたし」に見られていて隠せそうにないので、できれば逃げ出したかったが、どうすることもできず、盗みがばれても仕方ないとあきらめて、開き直る気持ち。

問十一　1　×　2　○　3　×　4　○　5　○

問十二　⑩　ウ　⑪　ア

問十三　自分が大金を盗んだことをとがめず、ていねいにもてなしてくれた上に、信用して仕事を与えてくれた「叔母さま」に心から感謝したため、「叔母さま」に自分の犯した罪をきちんと告白して謝罪したいと思ったから。

二

問一　見聞きした場所でなく未知の場所に行く点。

問二　心を揺さぶ

問三　イ

問四　(1)　異質なものに溢れていた世界が、自分の知っている世界になっていくこと。

(2)　世界の異質なものを知り得ていくことで何も感じないようになり、世界を小さくしてしまうことを否定するつもりはなく、自分もそうなるかもしれないが、最後まで未知の世界と向きあう旅を続ける努力をしたいと思っている。

問五　a　ウ　b　オ　c　ア

問六　筆者は、本当の冒険とは、現実に行く場所や体験に関わらず、心を揺さぶる未知の何かに向かいあうことだと考えているため、自分が辺境の地へ行ったり危険を冒して旅したりしているだけで世間から「冒険家」と呼ばれていることに納得がいっていないから。

三

1　寒暖　2　勤務　3　鉄棒　4　退職

ア　収納　番号　2　イ　縦横　番号　1　ウ　降車　番号　4　エ　善良　番号　2

オ　仮説　番号　3　カ　除幕　番号　4　キ　巻末　番号　3　ク　難易　番号　1

解説

一

問一　「教えさとされている思いがした」とあるので、わたしが叔母さまから何かを学んだのです。「わたし」が摘んだのにすぐ捨ててしまったので、カーネーションはしおれてしまいました。そのカーネーションを叔母さまがコップにさすと、翌朝ぴんと立っていたのです。このことから、「花にも命があること、最後まで大切にすべきだということ」などを学んだのです。

問二　「叔母さまの教えは、そういうふうにしてわたしに授けられていった」の「そういうふうにして」とはどういうふうにしてなのかを考えます。叔母さまは自分の考えを「わたし」に押しつけることはなく、行動でそれとなく教えさとしていました。よって、2行めの「おだやかな、いつにまにか効果が現れてくるという仕方で」が正解です。

問三　「それを飲んだくれて食いつぶし」について説明します。「食いつぶす」とは「遊びくらして財産を使い果たす」という意味です。「それ」とは手に入れた「農場」のことですから、カランが「遊びくらしていたため、手に入れた農場を失ってしまった」ということになります。

問四　なぜ子どもたちはカランを恐れていたのでしょうか。それは、傍線部④の前の「陰気な顔つき」などカランの外見の不気味さだけではありません。傍線部⑤の後の「猫や蛇を食べる」、「つれあい」を「毒殺した」などの悪いうわさも原因になっています。

問五　みんなはカランをきらって恐れています。そのカランが近づいてくるのを見たときに、犬のくさりをはずしたのです。問いは「何のため」と目的を聞いているので「カランを追い払うため」のように、犬をどうするのかを考えて答えます。

問六　A「(カランが) ひとこともいわずにわたしのそばをすりぬけ」、B「わたしは戸口にたちはだかって」、C「カランはわたしをちょっとおしのけて、部屋にはいっていった」と、それぞれつながっています。

問七　「あれよあれよと思うまに、お札が一枚、幅の広い袖のなかにかくれた」と描写された私の気持ちを考えます。「あれよあれよ」とは「ものごとの意外さにおどろきあきれて見守るさま」を言います。「わたし」の見ている前で、カランが大伯父のお金を堂々と盗んだことにおどろきあきれ、あわてているのです。

問八　「思惑」とは「考え、意図、もくろみ」という意味です。カランは、大伯父のお金を盗んだところをわたしに見られたので、「夕方、おれんとこへこないか。歌をうたってやるぞ」と、自分の魅力である上手な歌をうたうことで、「わたし」の口止めをしようとしたのです。

問九　「わたし」がカランの盗みを叔母さまにどのように伝えるのかを考える問題です。〔Ⅰ〕は、直後に「けれども叔母さまはわざとわたしを無視した」とあるので、言おうとしたが言えなかった「エ」、〔Ⅱ〕は、直前でカランと離れて叔母さまとふたりきりなので、叔母さまに盗みのことをささやいた「イ」、〔Ⅲ〕は、カランをひとりのこして庭へ出たので、びっくりした「ア」、〔Ⅳ〕は、再度、カランの盗みをつたえたはずなので、「ウ」になります。

問十　「ちょっと身をよじった」気持ちと「さっさと台所へ行って、テーブルについた」気持ちの二つに分けて考えます。まず前半は「お金を盗んだことがばれたのではないかと動揺し、逃げ出したくて身をよじった」、次に後半は「隠すことをあきらめ開き直ってテーブルについた」のです。

問十一　まず傍線部⑨の直前の、カランのパンくずをあつめて指をなめる動作は、嫌悪の対象になりますね。それから、もちろんカランの盗みに対しても嫌悪しています。また、盗人のカランが叔母さまに優しくされていることも嫌がっています。

問十三　カランが叔母さまにはっきりわかるようにお金を返した理由・気持ちを考えます。叔母さまが盗みの事実を知っていたにもかかわらず、カランを責めずに優しくしてくれたことに、カランは感謝しています。それから、カランが叔母さまのために本気で仕事をしたことから、反省の気持ちもあり、自分の罪を認めて謝罪する意志があることもわかります。

二

問一　傍線部①をふくむ段落をよく読みます。「観光旅行はガイドブックに紹介された場所や多くの人が何度も見聞きした場所を訪ねること」、「旅に出るというのは、未知の場所に足を踏み入れること」とあります。二十字以内で答えるので、この部分を簡潔にまとめましょう。

問二　「それ（旅に出ること）は、肉体的、空間的な意味あいだけではなく〜精神的な意味あいのほうが強い」と言っているので、筆者が旅で重視していることは、行ったことのないどこかに実際に行くということよりも、精神、心の面で未知の体験をすることだとわかります。最終段落に「心を揺さぶる何かに向かいあっているか、ということがもっとも大切なことだ」とあります。

問三　「そういった意味で、子どもたちは［③］の旅人であり冒険者だといえる」とあるので、まず「そういった意味」の指す内容を考えます。それは「生まれたばかりの子どもにとって、世界は異質なものに溢れています。もともと知り得ていたものなど何もない」という内容なので、子どもは毎日、未知のものに触れていることになります。したがって、旅人を最も強めた意味になる「究極の」が入ります。

問四　(1)…「さまざまなものとの出会いを繰り返すことによって、人は世界と親しくなっていきます」、「そうして世界がすでに自分の知っている世界になってしまったとき〜世界は姿を変えて、ひどく小さなものになってしまいます」などの部分から考えると、「世界と親しくなる」とは、子どもが大人になるにつれて、知っている世界が増えていくということになります。　(2)…この段落を最後までていねいに読むと、答えることができます。世界と親しくなっていくと、やがて、何も感じなくなっていく、それは苦しいことではないが、世界が小さなものになってしまうので、筆者は「冒険によって最後の最後まで旅を続けようと努力したい」と思っているのです。

問六　2段落に「辺境の地へ行くことや危険を冒して旅することが、果たして本当の冒険なのでしょうか？」とあるので、筆者は冒険をこのようなこととは思っていないとわかります。筆者の考える「冒険」とは、「どこにも行かなくても、生きることの中で、未知のものに触れ、心を揺さぶることがらに向かいあっているか、ということ」ですね。ですから、筆者は、冒険家と言われることに違和感を持っているのです。